中東情勢分析

連載「アラブの春」後の中東政治　第５回

エジプト暫定政権のネオ・ナセル主義
――「1954年３月危機」の再来か？

東京大学
先端科学技術研究センター
准教授　池　内　　恵

１．エジプトの反革命体制の形成

エジプトはアラブ世界の政治的なトレンドを設定する。2011年の１月25日に始まる18日間の大規模デモが，個人の政治的・経済的な人権の保障を通じた「尊厳」を求める社会革命へのトレンドを設定したとすれば，2013年７月３日，大衆が歓呼して軍のクーデタを賛美した時，それは民族主義感情の高揚と国家権力を賛美する反革命のトレンドを定めたといえよう。

もちろん，アラブ諸国がそのままエジプトのモデルを模倣したり追随したりするわけではない。チュニジアなどは，イスラーム主義勢力の劣勢というトレンドに部分的には流される面があるだろうが，同時に，軍あるいは内務省系の治安部隊の介入を避けるための政治合意が進んでいると見ることができる。エジプトはアラブ世界全体の「趨勢」を反映する中庸としての存在感があると共に，「反面教師」としても各国が参照にする対象である。

６月30日の反ムスリム同胞団の大規模デモか

写真①　軍翼賛のステッカー。スィースィー国防相の写真を中心に「エジプトが第一。軍と警察にテロの成敗を委ねる」と記されている。

ら，７月３日のクーデタ，そして８月14日に起きたカイロのラービア・アダウィーヤ広場でのムスリム同胞団支持者の座り込みの強硬排除による，この前後だけで800人にものぼると見られる大規模な殺害といった一連の経緯については，詳しい報道があるし，筆者自身も他の場所ですでに詳細に論じてきた(1)。それらを要約すれば，2013年６月・７月にかけての政変は，2011年のムバーラク政権の際に疎遠になった軍と警察が，「手を一つに」して再結合し，軍部専制・警察国家の再構築に乗り出したものと見ることができる。また，2011年の大規模デモで合流した世俗的な民族主義派（いわゆる「リベラル派」）とイスラーム主義派（ムスリム同胞団に代表される）が，今回の政変で決定的に決別し，世俗的な民族主義派がムスリム同胞団排除のために軍部の下に走ったと言える。それによって世俗民族主義派は，リベラルな価値観そのものを放棄し，2011年の革命で部分的に得かけた基本的人権や政治参加の権利をも極めて危ういものにした。

２．ネオ・ナセル主義の勃興

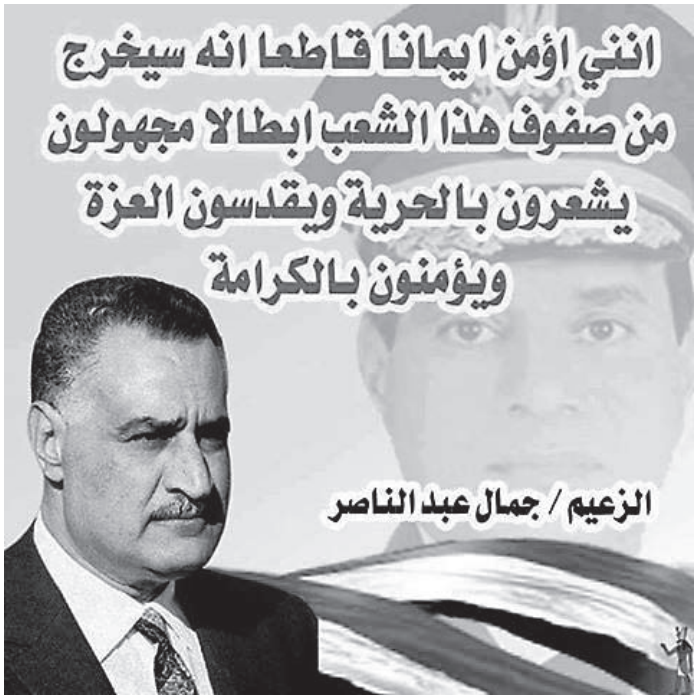
エジプトの歴史は振り出しに戻ったのだろうか。歴史に確固たる終着点はないとはいえ，何らかの後戻りをしたことは確かだろう。問題はそれがどこまで戻ったかである。「ムバーラク時代への逆戻り」という論法はしばし用いられる。しかし考えてみなければならないのは，それがムバーラク政権の2011年なのか，それとも2000年なのか，あるいは1990年なのか，それとも1981年まで戻ってしまうのかである。2011年なのであれば，またもデモと革命が繰り返されることになる。2000年（ムバーラク元大統領の次男ガマール氏への世襲の動きが本格的に始まった年である）なのであれば，再び新自由主義とネポティズム・縁故資本主義が幅を利かせるのだろうか。1990年であれば，イスラーム主義派の反体制武装勢力との全面対決で今後の10年近くを費やすことになる。1981年に戻ったのだとすれば，今後10年をかけて慎重に反体制勢力の鎮静化と，政権基盤の確立を図っていくことになる。

確かに，ムバーラク政権への回帰という側面はある。軍と警察が，ガマール氏やその周辺に連なった新興企業家層を抜きにして政権中枢に復帰したのであれば，２年半の革命や反革命を通じてムバーラク政権がむしろ純化され，最強硬派が政権を掌握したという見方もできる。しかし，ムバーラク政権のどの時代と比べても異なるのは，体制側と反体制側の双方における政治的な大衆動員の程度である。ムバーラク政権は大衆動員による直接的な国民の支持取り付けをほとんど行わなかった政権であり，またムバーラク政権時代の反体制派も，2011年の１月25日に至るまで，ほとんど大規模な大衆動員に成功してこなかった。直接的な政治的動員の不在こそがムバーラク政権期の特徴であった。その前提を欠いた現在，政治が単純にムバーラク政権時代に回帰すると見ることはできない。

スィースィー国防相が実質的な最高権力者として存在するエジプトの暫定政権の統治は，イデオロギーやプロパガンダの面では，またそれによる大衆動員のあり方においては，さらに古い時代に回帰している。それは1950年代から60年代にかけてエジプト政治の中核的イデオロ

筆者紹介

1996年，東京大学文学部イスラム学科卒。アジア経済研究所研究員，国際日本文化研究センター准教授を経て，2008年10月より現職。ウッドロー・ウィルソン国際学術センター客員研究員，ケンブリッジ大学客員フェロー，アレクサンドリア大学客員教授などを兼任した。中東地域研究，イスラーム政治思想を専門とする。主要著作に『現代アラブの社会思想―終末論とイスラーム主義』（講談社，大佛次郎論壇賞），『アラブ政治の今を読む』（中央公論新社），『書物の運命』（文藝春秋，毎日書評賞），『イスラーム世界の論じ方』（中央公論新社，サントリー学芸賞），『中東危機の震源を読む』（新潮社）などがある。



写真② インターネット上のスィースィー国防相礼賛の図像。ナセルの肖像を前面に配し，「私は固く信じている。民衆の中から，自由と名誉と尊厳を奉ずる，名も知られぬ英雄が現れてくるであろう」というナセルに帰せられた発言の背景に，スィースィー国防相の顔が浮かび上がる。「待望される英雄」のイメージを喚起しようとするものだろうか。

ギーとなり，アラブ世界全域にその影響を及ぼした「ナセル主義」である。

ナセル主義は国家主義的な民族主義であり，軍部の指導権を主張して，議会制や立憲主義，個人の人権や政治参加の権利を制限することを正当化した。翼賛デモを動員して，直接的な「民衆の意思」を表明させることで，独裁を正当化し，対抗勢力を抑圧した。重要なのは，ナセル主義が，地域大国としての誇りを国民に掻き立て，その支えとして，反米・対外強硬路線を鼓吹したことである。その際に，スエズ運河を擁する地政学的な重要性を梃子に，米国とソ連を競わせて，軍事援助や経済援助を呼び込もうとした。

現在のエジプトでは，スィースィー国防相の個人崇拝を高めようとする世論誘導のキャンペーンが様々なメディアを通じて展開されている。街頭には国防相の肖像写真が溢れ，大統領候補に推戴する声が民間メディアを含む各所から挙がる。そしてスィースィー国防相の個人崇拝の映像やスローガンには，必ずと言っていいほど，ナセルのイメージや，ナセル主義の要素が埋め込まれている。

3．1954年「3月危機」と軍部独裁の確立

そもそも6月30日の大規模デモと，それに支えられた7月3日のクーデタという一連の展開は，ナセルの権力掌握と独裁体制確立の過程と似通っている。そこで喚起されるイメージやスローガンも寸分違わないものすら多い。特に類似しているのは，「3月危機」と呼ばれる1954年3月の政治闘争である。

1952年7月に，ナセル中佐率いる自由将校団がクーデタによって王政を打倒し，議会制民主

主義や憲法を停止したが，1954年３月までの間，ナセルら青年将校は，クーデタに賛同した数少ない将官だったナギーブ准将を，大統領・首相に戴いていた。ナセルはその陰に隠れ，内相兼副首相として実権を握るに留めていた。そのナギーブはやがて自由将校団の青年将校たちの権力を制限しようとし，議会制民主主義への回帰を主張した。決定的な対立となったのが1954年３月である。先立つ２月の末にナセルは首相の地位につき，名実ともに実権を掌握しかけた。それに対してナギーブは一部の青年将校を抱き込んで抵抗し，議会制民主主義への早期復帰を大義名分に権力闘争を挑む。

これに対してナセルと青年将校たちの革命指導評議会は一時的に恭順の構えを見せる。ナセルは３月８日に首相を辞任して副首相に戻り，革命指導評議会は３月25日に声明を発し，クーデタ２周年となる1954年７月をもって解散し，議会を招集して民主主義へ復帰すると発表した。しかしこれは反対勢力への陽動作戦であって，その翌日から29日にかけて，ナセルは労働者のデモとストライキを動員し，青年将校たちの独裁を要求する「民意」を演出した。ここでナギーブ支持派は大衆動員の威力で負け，追い落とされる。これによってナセルは首相，そして大統領に就任し，名実ともに実権を掌握し，独裁体制を築いていく。

「３月危機」をクライマックスとするナセル体制の確立期を描いた歴史家ジョエル・ゴードンはここで「群集を利用したことは，革命指導評議会の権力確立への転換点となった」という。ナセルは「無秩序を生じさせて自らの有利に結びつけるという究極の機会を察知した」のである。３月26日から27日の二日間，両陣営の支持者が同時並行して集会を開き，騒乱状態が生じた。３月28日までに，組織化に優れ，群衆と警察の暴力を用いた政権側勢力は，反体制派を制圧し，革命指導評議会に国の指導権を保持してくれと叫ぶ群集の声に応えて見せた。この時ナセルの政権側勢力は，革命指導評議会の本部の前で群集に「政党はいらない！民主主義はいらない！」「革命万歳！」「ガマール（ナセルの名前），辞めないで！」「行け，ガマール，スエズ運河を取り戻せ！」といったスローガンを叫ばせた。また，群衆の他の一団には，ナギーブ支持派やリベラル派諸勢力の本拠地を襲わせた[2]。ゴードンによれば，「組織された群集の活動の決め手となったのは，３月27日の，政権支持派の労働組合指導者たちによるゼネストの声明だった」。ここで鉄道労働者の組合指導者が，食用油や煙草の組合と相謀り，ナセルに群集の動員を持ちかけ，ナセルはそれを受け入れた[3]。

この時，自由将校団の主要メンバーだったがナギーブ大統領の側についてナセルと対立したハーリド・モヘユッディーンの回想録によれば，後にナセルとハーリドが和解した時に，ナセルは「この準備のために4,000ポンドを払ったと率直に認めた」という。同時にハーリドは「このような手配は群集の中に呼応する者たちがいなければ成功することはなかっただろう」とも記している[4]。1954年３月危機と，2013年６月30日～７月３日の政変には，「民衆」の側のある程度自発的なデモを，軍部の指導の下で動員し，その「民意」を根拠に民主主義を廃していくという，共通の要素がある。そして次のような，1954年の３月危機の意味づけは，2013年の一連の過程についてもいえることだろう。

> ３月危機は，勝者にも敗者にも苦い後味を残した。この経験から将校たちは権力の本質を学び，いかにそれを維持するかを体得した。３月に革命指導評議会に戦いを挑んだ者たちは高い代償を払った。将校たちは，一気の攻勢に出て，反体制勢力の中心を全て支配しようとし，組織的なやり方で，軍と国家官僚機構の支配権を確立しようとした。初めて，国

家は明確に軍事的な様相を帯びた。[5]

「三月危機」で大衆動員を駆使した権力闘争に勝利して，議会制民主主義・立憲主義を主張するリベラル派を排除したナセルは，この年10月には自らへの暗殺未遂事件をきっかけに，ムスリム同胞団を「テロリスト」と名指しして大規模な弾圧を行って排除していった。

リベラル派・左派・ムスリム同胞団という主要な政治勢力をことごとく政治の公的舞台から排除・抑圧したナセルの内政統治は，国内の反対勢力を「テロリスト」と断定して大衆の恐怖を掻き立て，それに対抗して安定をもたらす唯一の勢力として軍の指導権を認めさせた。そして大衆の支持を維持するために，スエズ運河を国有化し，欧米との対決姿勢を強める民族主義を鼓吹する対外政策に踏み切った。ナセルの内政掌握は，国内では政治的抑圧を，対外的には欧米との敵対関係や孤立を招き，イスラエルとの対決と敗北に至った。

1954年のナセルの独裁体制確立の過程をなぞるように，2013年のクーデタ後の暫定政権も，

The Egyptian Citizen: "I think the way is safe now."
With "Terrorism" defeated, the Egyptian Citizen looks toward a bright "Future."
See page 191. *Ruz al-Yusuf,* 13 December 1954.

写真③　「エジプト少国民というこの時代の有名なキャラクターが，軍服を着て，サーベルを下げて，明るい「未来」を遠望している。背後には，腰に「テロリズム」と記された，髯を生やしたムスリム同胞団風の男が，銃を折られて横たわっている。『ローザ・ユースフ』誌1954年12月13日号（Joel Gordon, *Nasser's Blessed Movement*, 1996, p. 247）。

Egypt defeats Bulgaria by one goal in the international tournament
Egypt has scored its international goal!!
A sporting image of Nasser and the military regime: Nasser kicks "Stability" past the reach of "Terrorism" into the goal of "Domestic Politics."
See page 191. *Ruz al-Yusuf,* 17 January 1955.

写真④　「テロリズム」と胸に記された，髯を生やしたムスリム同胞団風のゴールキーパーを越えて，「内政」と書かれたゴールに，ナセルがボールを蹴り込む。ボールには「安定」と書いてある。『ローザ・ユースフ』誌1955年１月17日号（Joel Gordon, *Nasser's Blessed Movement*, 1996, p. 248）。

写真⑤　軍翼賛・反米主義の立て看板。スィースィー国防相を礼賛し，オバマ大統領をテロリズム支援のイスラーム過激派と非難する。（http://www.bbc.co.uk/news/world-middle-east-23809507）

ムスリム同胞団員と支持者を「テロリスト」と呼んで大量逮捕を行い，政府系・民間メディアの双方にそれを支持させる情報統制を敷いている。エジプトの言論空間には，米国をもムスリム同胞団と結託するテロリストと論難する極端な言論が蔓延している。米オバマ政権は10月に入ってついに対エジプト軍事援助の一部停止を打ち出しているが，これもまた反米論と民族主義感情の高まりを促進している。歴史の先例に倣うならば，スエズ運河の通航が政治問題化する未来すら想定する必要がある。

しかし1954年のナセル内相・副首相と，2013年のスィースィー国防相（クーデタ後は筆頭副首相を兼任している）には，決定的な違いがある。ナセルと自由将校団は，上昇する新しい中間層を代表しており，農地解放など民衆への再配分政策を掲げた。現在の軍部は既得権益そのものであり，実質的な分配政策を進めることはまずないだろう。ナセル主義から「大義」を除き，そのイメージや手法，スローガンのみを受け継いだネオ・ナセル主義は，どれほどの期間影響を持ちうるのだろうか。

4．人間的な，能率の劣る…

エジプトはどこに向かっているのだろうか。筆者は，2011年１月25日の大規模デモ勃発以来，エジプト政治の変転を見届けてきた。これからもまた，逞しく，活力のある，そして移ろいやすいエジプト民衆の民意と，その民意を誘導し，逸らし，争わせながら権力を維持しようとする為政者たちの，ある意味で巧みな，かつさまざまに問題の多い統治を，見守っていくつもりである。悲観することも，憤ることも，外部の観察者にはふさわしくない。エジプトの運命は，結局は，社会の底辺から上層までのエジプト人の意思の総体として決まっていくものでしかありえない。

しかし，政治・経済・社会の現実や政策からかけ離れたネオ・ナセリズムに為政者も民衆も酔いしれる現在のエジプトに直面して，若干の

写真⑥　エジプトの街頭で配られるポスター。「軍と民衆は手を一つに」というスローガン。スィースィー国防相をナセルとサダトに並べ，背景にはタハリール広場の民衆が。下にはオバマ大統領を侮辱した図像が配される。（pic.twitter.com/UUZ6Kyh3kX）

感慨を記すことを許していただきたい。ここでぜひ想い起こしていただきたいのは，スペインで1936年から39年にかけて，現在のエジプトと同じように世界の注目の下で争われた革命と内乱であり，これに主体的にかかわって，外部世界に伝えた一人の知識人の回想である。軍部・保守派・知識層を支持基盤とするフランコ将軍派と，左派・人民戦線との間で戦われたスペイン内戦に，当初は人民戦線側に共感する姿勢から，記者として身を投じたジョージ・オーウェルは，やがて人民戦線内部の分裂・党派抗争に幻滅し，内戦の行く末を悲観し，次のような諦念に至った。

全体の運動はある種のファシズムの方向に向かわざるをえないだろう。きっと，もう少し丁寧な名前で呼ばれるファシズムだろう。しかしここはスペインだから，ドイツやイタリア的亜種よりももっと人間的な，しかも能率の劣るファシズムであろう。(6)

エジプトの革命もまた,「もっと人間的な，しかも能率の劣るファシズム」への道を歩んでいるのだろうか。

（注）

(1)　池内恵「『6・30』デモで再燃したエジプトの革命」『フォーサイト』2013年７月３日（http://www.fsight.jp/17982）；池内恵「ムルスィー退陣へ向け，軍の最後通牒の期限が迫る」『フォーサイト』2013年７月３日（http://www.fsight.jp/18028）；池内恵「『スィースィー将軍のブリュメール18日』を待ちながら」『フォーサイト』2013年７月４日（http://www.fsight.jp/18043）；池内恵「エジプト７月３日のクーデタ――乗っ取られた革命」『フォーサイト』2013年７月４日（http://www.fsight.jp/18054）；池内恵「エジプト『８.14事件』を読むための７つのポイント」『フォーサイト』2013年８月20日（http://www.fsight.jp/19979）；池内恵「ロシアへの接近をほのめ

かして牽制するエジプト首相」『フォーサイト』2013年８月22日（http://www.fsight.jp/20014）；池内恵「『アラブの春』遠ざかるエジプト」『産経新聞』2013年７月８日付朝刊；池内恵「エジプトの『革命』と『反革命』――『七月三日クーデタ』の大きな代償」『中央公論』2013年９月号（128巻９号），86－95頁；池内恵「エジプトの７月３日クーデタ――『革命』という名の椅子取りゲーム」『UP』2013年８月号，24－32頁；池内恵「『エジプトの天安門事件』で地域秩序が流動化」『季刊アラブ』第146号，2013年９月，４－５頁。

(2) Joel Gordon, *Nasser's Blessed Movement : Egypt's Free Officers and the July Revolution*, Cairo : American University in Cairo Press, 1996, p. 135.

(3) *Ibid*., p. 136.

(4) Khalid Mohi al-Din, *Wa al-An Atakallam*, Cairo, Markaz al-Ahram li al-Tarjama al-Nashr, 1992, p. 312 ; Khaled Mohi El Din, *Memories of a Revolution : Egypt 1952*, The American University in Cairo Press, 1995, pp. 227–228.

(5) Gordon, *Nasser's Blessed Movement*, p. 137.

(6) ジョージ・オーウェル著『カタロニア賛歌』都築忠七訳，岩波文庫，187頁。